

16. カルチトニンの成長期顎骨に及ぼす影響に関する 実験的研究（第1報）

—とくに歯槽骨について—

○新城 啓和, 木村 光孝

(九歯大・小児)

カルチトニン(CT)は1963年Hirschらによって, ラット甲状腺において発見されたポリペプチドホルモンであり, 血清カルシウムとリンの強い低下作用を有する物質である。その生理的作用については, 過去の研究者により骨に対しては骨吸収抑制作用を認め, 腎臓に対しては尿中磷排泄促進作用が報告されている。そこで臨床的立場からカルチトニンの各種代謝性骨疾患に対する適用がなされているのが現状である。

しかし歯科の分野において, とくに成長期顎骨におけるカルチトニンの作用については不明である。そこで演者らはまず正常な歯槽骨に及ぼすカルチトニンの影響を知るため, 実験モデルとして生後3週齢ラットを用い以下のような実験を行った。

I群: 正常対照群: 正常食+水道水+生食水を大腿後部に筋注(0.2cc/100g, 毎日)を行った。

II群: ECT実験群: 正常食+水道水+ECTを大腿後部に筋注(0.2cc/kg, 毎日)を行った。飼育後3週, 4週, 5週目にラットを放血致死させ頭部と四肢を採取し, X線学のおよび光学的に観察したので現在までの結果について報告する。